

## 教師研修における内省活動と教師のフィードバックが及ぼす影響について ——タイ人中等学校現職教員日本語教師新規養成講座研修生を対象に——

古内綾子、Narisara THONGMEE

### 1. はじめに

国際交流基金バンコク文化センター（以下、JFBKK）では、「タイ人中等学校現職教員日本語教師新規養成講座（以下、新規研修）」を実施しており、2013年度には新規研修第17期（以下、新規17期）が実施された。本報告は、新規17期での「ボランティアとの活動」授業で行なった、研修生自身による学習の振り返り活動の取り組み方法、及びその結果を報告するものである。

#### 1.1 新規研修の概要

新規研修は、中等学校での日本語教員不足解消のために1994年よりタイ王国教育省とJFBKKが共催で実施している教師養成の研修である。研修生はタイの中等学校在職中のタイ人教師で、日本語科目以外を専門としている。これらの教員は日本語学習未経験であり、約10ヶ月間<sup>(1)</sup>、所属校の業務を離れ、JFBKKで日本語及び日本文化、日本語教授法を学んだ後、所属校に戻り日本語科目を担当する。研修は1学期6～7週間の6学期制で、学期間に1週間の休暇がある<sup>(2)</sup>。毎年、13～15名程度の研修生が参加し、2014年3月現在、修了生は264名にのぼる<sup>(3)</sup>。

新規研修の目標は「①初級終了レベルまたは日本語能力試験N4程度の日本語力を身につけること」、「②中等学校で教えるのにふさわしい日本語教授技術を身につけること」、「③日本文化・事情についての理解を深め、生徒に紹介できるように方法を身につけること」である。このうち、新規研修では②の「中等学校で教えるのにふさわしい日本語教授」を、コミュニケーションを重視した日本語の教授方法と考え、そのような教授法の授業を実践している。

加えて、学習の振り返りの活動を取り入れ、研修生が自律的に学べる環境を設計している。

#### 1.2 新規研修における振り返りの活動について

振り返りの活動は、研修生が自身の学習をモニターし、自律した学習を行うことを促すことと、研修生が自身の日本語学習過程や経験を意識化し記録しておくことで、教育現場に戻った時にそれらを活用しやすくすることを目的としている。また、研修生の中には言語学習に慣れていない者もいるため、振り返りの活動を通して気づいた学習上の問題点を教師と共有し、ともに解決するためのツールとしても利用している。

活動としては、一週間の学習内容や問題点、疑問点、その考察、また授業のやり方などを記録する「学習ジャーナル<sup>(4)</sup>の作成」と、研修生の作文や作品、学習目標その自己評価、成績などを保存する「ポートフォリオの作成」を実施している。学習ジャーナルは、新規研修開始から修

了まで継続して取り組ませており、ポートフォリオは学期毎にまとめるように指示している。

### 1.3 新規研修における振り返りの活動についての問題点と効果

新規研修第16期までの振り返りの活動を観察すると、学習ジャーナルを研修修了時まで中断せず書き続けることが難しい人が多く見られた。また、「勉強になった。」「今日の活動は良かった。」など感想を記録するにとどまることも多く、何を記録すべきなのかわからないという研修生もいた。そのため、この振り返りの活動に意味を見出せず継続しないという研修生もいるようであった。これらの問題は、タイ人学習者がこれまでの学習経験の中で、自身の学習を振り返り評価するという経験が少なく、なじみがないことが原因だと考えられた。一方で、学習ジャーナルを研修修了まで継続した研修生は、自身の日本語運用能力について客観的に評価し、努力や改善が必要な学習項目を具体的に述べることができた。また、記録した教授方法を模擬授業実施時に活用し、コミュニケーションを重視した効果的な授業を行うこともできていた。

これらの事例を観察し、新規研修では振り返りの活動は自律的な学習に効果があると考え、これまでも継続してきた。しかし上述の通り、継続が難しく、何を書いていいかわからず感動を記録するだけになるという問題点が残っていた。そこで、これらの解決を目指し、新規17期では新たに「ボランティアとの活動」の授業において活動記録を書くという振り返りの活動を計画し、教育的な介入及びフィードバックを行った。

## 2. 新規研修の「ボランティアとの活動」について

新規研修の開講科目の中に日本人ボランティア<sup>(5)</sup> (以下、ボランティア)が参加する「ボランティアとの活動」という科目がある。これは研修生が「学んだ日本語を日本人相手に実際に使いながら、運用力を伸ばすこと」、「書道や生け花など日本の文化を体験し、タイの文化と比較しながら異文化を理解すること」が目的の授業である。具体的には、ボランティアと研修生がペアやグループで決められたテーマについて話す「会話練習」や、一緒に折り紙、浴衣の着付けなどの日本文化を体験する「日本文化活動」、バンコクの観光地をグループで巡るなど JFBKK の外に行う「課外活動」の三種類の活動がある。1学期半ばごろから5学期半ばまで、毎週火曜日の午後2時半から4時半までの約2時間実施している。

「ボランティアとの活動」は、活動や経験から日本語や文化を学ぶ授業であり、活動の中で学んだことを意識化し、記録する振り返りの活動には適した授業であると考え、この授業で学習記録を作成することにした。

## 3. 実践報告：「ボランティアの活動」の記録の作成について

本実践は、新規17期の2学期半ばから5学期に研修生13名を対象として報告者2名が協働で、実践したものである。下記にその実践の詳細を述べる。

### 3.1 実践の目標

本実践は「1.3 新規研修における振り返りの活動についての問題点と効果」で述べた問題点の改善が目標であるが、研修生に提示するため、下記のような目標を立てた。なお、①と②はそれぞれ文化理解、日本語に関してどのようなことを具体的に書けるようにするという目標である。

- ① ボランティアとの交流を通して学んだ日本文化や日本人の考え方、タイとの違いを記録し、自分なりの異文化理解を進めること。
- ② ボランティアとの活動の中での自身の日本語運用について具体的に振り返り、記述しておくこと。
- ③ 活動記録を継続して記述することを通して、振り返りの活動に慣れること。

### 3.2 活動の記録作成の手順

本実践は、図1のような流れで実施し、活動の記録は学期ごとにA3用紙1枚にまとめるようにした(図2参照)。

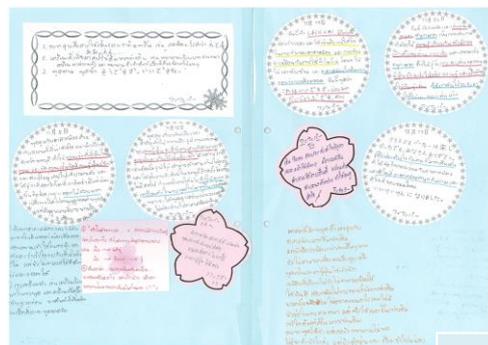
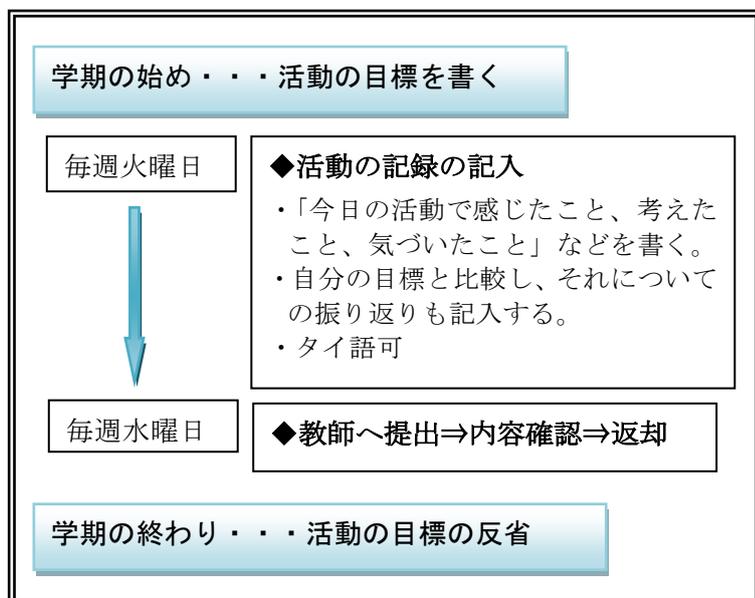


図2 活動記録の例

図1 「ボランティアとの活動」活動記録作成の手順

研修生は、学期開始時に「ボランティアとの活動」の授業の学習目標を各自考え記入し、毎週活動終了時に配布される丸い紙に活動記録を書き、それを用紙に張り付けた。活動の記録を記入する際には、自身の日本語運用や文化に関わることについて活動の中で感じたこと、考えたこと、気づいたこと、自分で立てた目標と比較したその評価も記入した。学期終了後は活動全体を振り返り、目標と照らし合わせた自己評価を記入した。なお、これらすべての記録はタイ語である。

### 3.3 教師の介入とフィードバックの方法

次に、活動の記録作成における教師の介入、フィードバック方法の順序、方法について述べる。

#### ① 2学期の取り組み

まず、2学期は活動の記録の作成に慣れ、習慣化することを目標とし、毎週記録を書いている

かどうかのみの確認を行い、記録した内容への言及は行わなかった。ただし、毎週の授業の最後に「できるだけ具体的に記述するように」という指示を、例を示しながら、口頭で行った。

## ② 3学期の取り組み

2学期作成の研修生の活動記録の内容を分析した結果、記述に具体性がなく、感想の記述に留まっている人が多かったため、振り返りのポイントを示した。まず、研修生が書いた記録の中から、自身の日本語運用能力の問題点や今後改善していきたいこと、そのための具体的な行動が詳細に記述されていたものを選び、それを例として、どのように何を記録したらいいかを考える時間を設定した。そして、自身の行動やその状況を詳細に記述すれば、次の行動に移しやすく、振り返りがその後の自分の学習に活用できることを全員で確認した。

## ③ 4学期の取り組み

振り返りの記述の具体性において個人差が見られたため、個別のフィードバックを行った。記録を読み、具体性に欠ける部分にコメントや質問文をタイ語で書く形でフィードバックを行った。これは、その事象に対する内省を深め、その結果考えたことを文字化させることを目指したものである。また、同じグループで活動した研修生同士でお互いの記録内容を読み合い、活動時の様子やその記録についてメッセージを書く活動も実施し、研修生同士の評価活動も取り入れた。

## ④ 5学期

活動の記録及び、目標の設定、自己評価を継続させた。

## 4. 実践の成果と結果

### 4.1 振り返り活動の継続

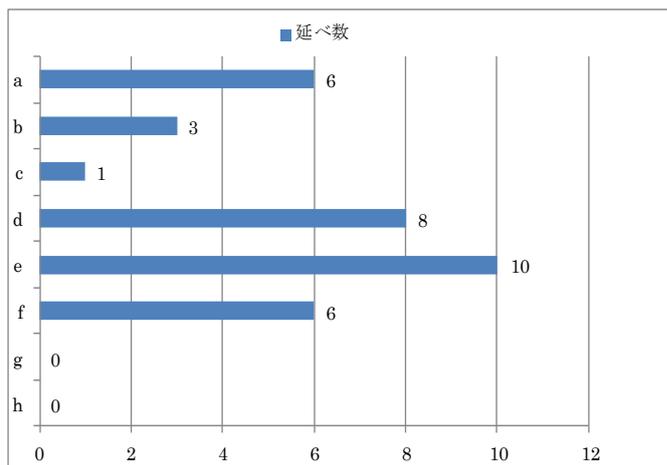
実践の結果、13名全ての研修生が「ボランティアとの活動」の記録を中断することなく、5学期終了時まで継続することができた。また、5学期になると教師の指示がなくても自律的に取り組めるようになるという行動の変化が見られた。この結果から、本実践の目標の三つ目である「振り返りの活動を継続させること」は達成できたと考えられる。

この行動の変化に関してその意識を調査するため、アンケート調査を行った。質問は二つで、質問1は振り返りの活動を続けられた理由を下記の a-g の六つの選択肢から選ぶもの（複数回答可）で、質問2は振り返りの活動に対する感想・意見をタイ語で自由に記述するものである。なお、選択肢 a-g は、動機づけを自律性の度合いによって分類した「自己決定理論」<sup>(6)</sup>を参考に作成した。結果は、図3のようになった。

- a. 先生に毎回「書いてください」と言われて、書かなければならないと思ったから。
- b. 友だちも書いているので、書かなければならないと思ったから。
- c. 友だちと一緒に書いたので、忘れずに書いて、取り組みやすかったから。
- d. 振り返りを書くと、将来、授業をするときの役に立つと思ったから。

- e. 振り返りを書くと、自分が何を勉強したかを確認することができるから。
- f. ボランティアの方と話したことや勉強したことを、書いておきたいと思ったから。
- g. 一週間に1回だけで、書きやすかったから。あまり大変ではなかったから。
- h. その他

図3 振り返り活動が続けられた理由(n=13)



「e.振り返りを書くと、自分が何を勉強したか確認することができるから」という理由が最も多く、次に「d.振り返りを書くと、将来、授業をするときの役に立つと思ったから」を選んだ人が多かった。つまり、振り返りの活動は価値のある活動であると認識し、取り組んでいた研修生が多かったと考えられる。このような課題の重要性を意識し、自身の将来のために役立つか

ら行うという手段的な動機をもつ段階を、自己決定理論では「同一視的動機づけ」の段階と呼ぶ。この段階は自律性が比較的高い状況である。さらに、選択肢 f が約半数の研修生に選択されていることから、振り返りの活動自体に興味を持って取り組んでいる人がいたこともわかる。将来のためという目的ではなく、課題自体に興味やおもしろさを感じ行動するという動機をもつ段階は、「内発的動機づけ」の段階と言われ、非常に自律性の高い状態である。これらの結果から、多くの研修生が自律的にこの活動に取り組んでいたと考えることができるだろう。

一方で、選択肢 a も半数の研修生に選ばれていることから、教師の指示という外部からの強制により課題に取り組む人がいたこともわかる。この段階は、「外発的動機づけ」と呼ばれ、自律性が最も低い状態である。加えて質問2の回答でも「最初は先生が「書いてください」と言ったから書いた」という記述があり、これからも外発的な動機づけがあったことがわかる。しかしながら、そのほとんどが「その後、書けば書くほど好きになった。」「たくさん書いたら、役に立つと感じてきた。」などの記述と共に書かれていた。この記述から、当初は外発的動機づけの段階であったが、振り返りの活動に価値を見出し、動機づけがより内発的な段階へと変化した様子が見られる。振り返りの活動が継続できた理由には、動機づけの変化が影響していることが窺える。

#### 4.2 内省内容の変化

教師の介入やフィードバックが振り返りの内容にどのような影響を与えたかを調べるため、活動記録を縦断的に分析した。なお、以下に示す表1、2にあるS1～S13は研修生を表し、記録記述の原文はタイ語である。タイ語の記述は報告者が日本語に翻訳した。

#### 4.2.1 日本語運用についての変化

日本語運用についての内省内容の変化を分析するため、2 学期に実施した「タイダンスの活動記録」と5 学期に実施した「季節のポスター発表の活動記録」の二つを比較分析した。前者は研修生がボランティアにタイダンスの踊り方を説明し、教えるという活動であり、後者は日本の四季をテーマにしたポスターをボランティアと協働で作成し、そこに表す年中行事や季節の特徴を研修生が調べ、ボランティアの前で発表するという活動である。この二つは、研修生が知っていることや調べた内容について口頭で説明するという点が共通している。

表 1：日本語運用に関する活動記録

2 学期【タイダンス】	5 学期【季節のポスター発表】
<p><b>①話す練習ができてよかった。(S3)</b>                      ・下手な日本語で教えて申し訳ありませんでした。(省略) いろいろ話したかったが、日本語は間違ってしまった。(S4)                      ・総合的に技能を活用することができた。(S5)                      ・実践的に会話できるので、とても役に立った。まだ上手に話せないが、たくさん話したい。(S7)</p> <p><b>②それに話す練習もできた。間違った日本語で話したが、無事に会話できた。(S8)</b>                      ・会話に使う日本語を練習できてよかった。文法を考えないで話したので、話す勇気をもてるようになった。(S10)                      ・話す練習もできた。(S12)</p>	<p><b>①話す練習の良い活動だ。(省略) 日本語で発表できて嬉しかった。時々原稿を見て読んだが、日本語でたくさん発表できたと思う。(S3)</b>                      ・グループメンバーが2人休んだから、たくさん発表した。練習の時は上手くできたが、本番になると、あまり上手くできなかった。(省略) 2回発表したので、2回目はより上手にできた。(S6)                      ・「冬」のポスターを発表した。何回も発表したの、とてもよかった。話す練習にもなった。(S7)</p> <p><b>②1 回目の発表は緊張したが、2 回目はもう緊張しなかった。1 回目はポスターを上手く使わず、ただ話しただけ。先生からアドバイスを受けて、2 回目の発表はよくなった。(省略) 2 回発表があったから、一度間違っても、2 回目のとき改善できた。(S8)</b></p>

2 学期の活動記録を見ると、「話す練習ができた(S3)」「実践的に会話できる(S7)」など自身の活動を評価する記述が見られるが、何をどの程度話すことができたのか具体性がない。しかし、5 学期になるとその記述内容に具体性が見られるようになる。S3 の場合、2 学期は「①話す練習ができてよかった」だけであるが、5 学期は発表できたということだけではなく、それは時々原稿を見ながらであったことなど、達成できた条件なども記述している。S3 は自身の日本語運用能力をより客観的かつ詳細に分析し、振り返ることができるようになったと考えられる。また、S8 の場合、2 学期は、「②間違った日本語で話したが、無事に会話できた」というように、達成したかどうかの最終的な結果のみが記述されているが、5 学期は1 回目の発表と2 回目の発表の達成度の違いとその過程及び理由についても記録している。この変化から、S8 は自身の日本語運用においてその過程にも目を向け、自身の変化を詳細に内省し評価できるようになったと言える。

S3 と S8 の例に見るように、5 学期の記録は、「できた」「できない」のような最終的な結果の記述にとどまらず、そこまでの過程や自身の変化、何ができたのかなどを詳細に記述したものが見られるようになった。これらのことから、研修生は活動の記録作成を通して、自身の日本語運用能力についての内省がより詳細になったと考えられ、3.1 で述べた、本実践における目標の二

つ目である日本語運用の振り返りに関しての目標も達成できたと言える。

#### 4.2.2 文化理解についての変化

文化理解についての内省内容の変化を分析するため、2学期と5学期の全ての活動記録の中から「日本文化」「タイ文化との比較」「異文化理解」等文化に関わる記録を抽出し比較分析した。

表2：文化に関する活動記録：2学期と5学期の記述

2学期の活動記録より抜粋	5学期の活動記録より抜粋
<p>・タイの文化が伝えられてとても嬉しかった。ボランティアの方もタイのジョンクラベンを着ることに興味をもってくれて嬉しかった。初めてジョンクラベンを着たので、私も気に入った。(S1)</p> <p>・タイの文化を伝えられて満足した。(S2)</p> <p>・ボランティアはタイダンスに関心をもってくれたので、私も教えたいという気持ちがいっぱいだった。(S4)</p> <p>・タイ文化を伝えられて嬉しかった。(S8)</p> <p>・日本人にタイ文化を伝えられて、満足した。(S13)</p> <p>・家族について話したことにより、タイに住む日本人の生活が分かった。(S5)</p>	<p>①日本人は物を渡す時、気を遣うので、様々な包み方がある。(S1)</p> <p>・ふろしきでいろいろな物を持てるので、とても便利だと思います。それに、これを使った後で、捨てないで何回も使えますから、すごいです。④もし、タイ人はこのふろしきも使ったら、ごみがへるそうと思います。これから、私はこんなかばんを作りたいです。(S4)【原文をそのまま引用】</p> <p>・(ふろしきは)紙を使わないし、とてもきれいで、資源を大事にしていると感じた。(S5)</p> <p>・ふろしきについて勉強した。布で様々なものを包めるのがとても気に入った。日常生活に活かせると思う。②日本人は繊細な気持ちであると感じてられて、感動した。(S6)</p> <p>・布で「かばん、ふくろ」といった様々な形を作り者を包むことがとてもいいアイデアだと思う。(S7)</p> <p>③ボランティアの皆さんは上手に包めたので、これが日本人の特徴であると感じた。ふろしきを使って物を包むのはとても素敵だと思う。ゴミを減らすことにもいい。このアイデアに感動した。(S11)</p>

2学期には自文化を紹介するおもしろさなどの感想や「日本人の生活が分かった(S5)」というような具体性のない記述が見られる。しかし、5学期になると、ふろしきの活動を通して「①日本人は物を渡す時、気を遣うので、様々な包み方がある。」「②日本人は繊細な気持ちであると感じられて、感動した」「③ボランティアの皆さんは上手に包めたので、これが日本人の特徴であると感じた」など、具体的な事象から自分なりに日本文化を理解している様子や、「④もし、タイ人はこのふろしきも使ったら、ごみが減るそうと思います」など、自文化に引きつけた記述も見られる。これらの記述から、日本文化の理解とそれらの比較を通して異文化理解、自文化理解も進んでいる様子が見られるので、3.1で述べた本実践の目標の一つ目である文化理解に関する目標も達成できたのではないかと考えられる。

#### 4.2.3 その他の記述内容の変化

さて、活動記録には日本語運用や文化理解以外にも、その活動自体のおもしろさや難しさについて記録されている。これらの記録についても2学期から5学期までの分析を行った。

2学期の記録には「ボランティアとのかつどうは親切ですね。私は大たのしいです。ありがとうございます。(S3)【原文を引用】」「南部のダンスを教えたとき、緊張したが、楽しかった。(S2)」など活動の楽しさなどの単純な感想が目立つが、5学期になると新たな視点を持った記述が表れ

ている。例えば、「(季節のポスター発表の活動は) 説明する時に、これまで学習したことを生かして、「聞く・話す・やりとりする」ことも練習できる。この活動は言葉も文化も学べるものだ。それに、説明する力もつく。私はこの活動が大好きなので、ぜひ自分の授業にも取り入れたいと思っている。(S10)」や、「ボランティアは A、B、C、D、E の 5 つのグループがあったので、私たちは 5 回発表した。先生は時間を管理するために、2 つの教室をまわった。(S1)」などの記述である。これらの記述は、「ボランティアとの活動」という授業を教師の目線で観察し、授業設計やその運営方法に着目した記述だと考えられる。このような記録からは、研修生が様々な視点を持ち、活動を分析するように変化した様子が見られる。

### 4.3 教師からのフィードバックを受けた後の成果

4.2 で述べたような内省の変化が教師の介入の成果であるが、個々のフィードバックの直接的な影響には下記のような例が挙げられる。どちらも、4 学期実施の「私の宝物」をテーマにした会話練習の活動記録である。

#### 4.3.1 S12 の場合：4 学期の活動 会話練習【テーマ：私の宝物】の分析と考察

表 3：研修生 S12 の活動の記録（抜粋）

活動の記録	教師のフィードバック	研修生からの返事
・宝物について話した。日本人の結婚の写真は雑誌に掲載して、 <u>①記念にすることができることを知った</u> 。タイは自分のアルバムを作ります。それから、今回は原稿なしで、チョンブリー県の観光地について説明した。ある程度は説明できたが、 <u>②もっと準備したほうがいいと思った</u> 。なぜなら、原稿を読むのではなくそのほうが、自然に話せるから。	①「～を知った」と書いてありますが、それは話を聞いただけなのか、ボランティアとの話の中で、考えて理解したことなのか、どちらですか。「知った」過程を書いてください。 ②「準備したほうがいい」と書いてありますが、何を準備したほうがいいと思いますか。	→ボランティアから聞いて、理解を確認するためにインターネットで調べた。  →スクリプトをもっと準備したいと思った。大まかな内容やテーマに関わる語彙

S12 は、話すために「②もっと準備した方がいいと思った」と日本語の運用について書いたが、具体的な改善方法の記述がなかった。そこで、この点について表 3 のように教師のフィードバックを行った結果、「スクリプトをもっと準備したい、大まかな内容やテーマに関わる語彙」を準備しておこうという具体的な改善方法を記述するに至った。S12 は自身の日本語力や勉強不足を意識しつつも、改善方法やどのような点が不十分なのかという点が不明瞭であったが、教師のフィードバックをきっかけとして、自身の学習過程を改めて振り返り、自らすぐに行動に移せる改善方法を述べることができるようになった。

#### 4.3.2 S13 の場合：4 学期の活動 会話練習【テーマ：私の宝物】

S13 はこの活動で「①宝物についてのアイデアを得ることができた。」そして、宝物は「家族」と「思い出」だと「②聞いて感動した。」と述べていた。この二点について詳細を問うフィードバ

ックと日本語運用力について質問した結果、①については「日本人の宝物は物だけではなく、家族、思い出、昔の印象といったものもある。」という日本人の考え方に対する気づきや、「先生から課題が出た時、物しか考えられなかった。」という自身の考え方の振り返りと活動後の変化、またこの経験から「日本人のデリケートな考え方に気が付いた。」など自分なりの文化理解を新たに記録することができた。また、②については「宝物は物だけではなく、好きな人のことも含めるということ。人であれば、貧富の差による違いにつながらないから。」という点を感動した理由としてをあげ、これについて実践の場で生かしたいと考えたことまでを記録している。日本語運用に関しても事前準備とその評価、および授業中に使った言語表現を記録し、次の授業への改善案を記録している。S13は教師のフィードバック受け、自分の気づきを具体的に言語化し、次の活動に向かった具体的な改善方法も記録することができた。

表4：研修生 S13 の活動の記録（抜粋）

活動の記録	教師のフィードバック	研修生からの返事
宝物について話した。ボランティアからいろいろな質問があつて、理解できたが、答えられなかった。① <u>宝物についてのアイデアを得ることができた。</u> 二人の宝物は「家族」と「思い出」。② <u>聞いて感動した。</u>	①どんな「宝物についてのアイデア」をもらったのか。	→日本人の宝物は物だけではなく、家族、思い出、昔の印象といったものもある。先生から課題が出た時、「物」だから、物しか考えられなかった。私がイメージしたものは「好きな人からもらった物」。このアイデアから、日本人のデリケートな考え方に気が付いた。
	②どんな所に、何に感動したのか。	→ボランティアの考え方が印象に残った。その考え方を生かして、学生に伝える。それは、どんなことかという、宝物は物だけではなく、好きな人のことも含めるということ。人であれば、貧富の差による違いにつながらないから。
	③目標と照らし合わせて、今日の活動はどうだったか。また、達成できなかったら、次の活動はどうするのか。	→準備してきたので、正しい文法を使って話せた。やりとりしている間に、新しい情報も得た。例えば、どこで買ったか、いくらくらいか、など。ボランティアの質問を聞いて、理解できたが、短い文で返事した。これから、もっとスクリプトを準備しなければならぬと思った。今まで、ほとんど話す内容だけ準備して、文章を書いていないから、正しく話せないということが分かった。

上記で挙げた S12 と S13 の例をみるように、教師のフィードバックをきっかけに、日本語運用について内省され、今後の活動に向けた学習方法を見つけることができた。また、他の事象についても指摘されることを通してその思考が言語化されている。教師が研修生に振り返りのポイントをフィードバックすることで内省を促し、詳細で具体的な内省ができていたと言えるだろう。

## 5. 今後の課題

本実践では、教師の介入やフィードバックなどを実施し研修生の内省を深めようと試みた。しかしながら、内省を深めるためのメタ認知能力を育てるためには、教師が学生と対話するだけでなく、仲間同士で話し合える環境を提供していく必要がある（久保田 2010 : p70）。本実践におい

ては、研修生同士で話し合うことを通して内省を深める環境を十分に提供することはできなかった。3.3 でも述べたように、教師のフィードバックよりも研修生同士の話し合いの方がその後の行動に影響を与えるということもあった。今後は、教師の指導や対話、フィードバックに加えて、研修生同士が意見を交換したり、発表したりできる環境を提供し、その活動を通して内省を深めるよう促すことが必要だと考える。

## 注

- (1) 研修は、毎年5月中旬～翌年の3月末もしくは4月頭までの10カ月間である。
- (2) 新規17期の学期は、1学期(2013/5/13-7/5)、2学期(2013/7/15-8/30)、3学期(2013/9/9-10/25)、4学期(2013/11/4-12/20)、5学期(2014/1/6-2/14)、6学期(2014/2/24-3/28)であった。
- (3) このうち、離職及び退職した者は30名。
- (4) 学習ジャーナルは、一週間の授業を受けたあと、どんなことを学んだか研修生が自身の学習を振り返って、タイ語でノートに記述する。毎週月曜日に教師に提出し、教師がコメントやアドバイスなどを書いて返却する。
- (5) ボランティアは毎年約20名ほどの登録があり、前期(6月～10月)後期(11月～3月)で登録を行っている。応募はJFBKKの掲示板や図書館に募集概要を掲示か、登録済のボランティアの紹介の形で実施している。2014年3月現在は、23名の登録者がいる。
- (6) 自己決定理論は、動機づけの理論における外発的動機づけと内発的動機づけは二項対立ではなく結びついたものであるという理論である。また、外発的動機づけは自己決定の度合いによって四つの段階に分類されている。(中谷 2006.p122)

## 参考文献

- 金考卿(2006)「研究発表の演習授業における「質疑・応答」活動の可能性—発表の内容面に対する「内省」の促進という観点から—」『世界の日本語教育』16、国際交流基金、pp89-105
- 久保田賢一(2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』、関西大学出版部
- 上淵寿編(2004)『動機づけ研究の最前線』、北大路書房
- 中谷泰之(2006)「6. 動機づけ—情意のはたらき」鹿毛雅治編『朝倉心理学講座8 教育心理学』、朝倉書店、pp120-137
- 八田直美(2009)「ノンネイティブ日本語教師にとっての「教師の成長」—訪日研修参加へのインタビュー調査から—」『日本語教師の過去・現在・未来』第2巻、凡人社、pp159-180
- 羽太園・西野藍(2012)「非母語話者日本語教師を対象とした超短期研修の成果—体験交流活動を通じた意識の変化—」『国際交流基金 日本語教育紀要』第8号、国際交流基金、pp169-184